

学位論文及び審査結果の要旨

横浜国立大学

氏名	尾崎 司
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	環情博甲第2210号
学位授与年月日	令和3年3月25日
学位授与の根拠	学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第4条第1項及び横浜国立大学学位規則第5条第1項
学府・専攻名	環境情報学府 環境イノベーションマネジメント専攻
学位論文題目	ICT化されたルーブリック評価法を活用した保育実習プログラムの開発 — 評価過程と省察におけるエピソード紐付け法による改善を目指して —
論文審査委員	主査 横浜国立大学 教授 安藤孝敏 横浜国立大学 教授 志田基与師 横浜国立大学 教授 周佐喜和 横浜国立大学 准教授 長谷部英一 東京家政大学 教授 平山祐一郎

論文及び審査結果の要旨

現行の保育実習プログラムでは、①実習評価票が標準化されていない、②適切なタイミングでフィードバックできる仕組みがない、③実習中と実習後の学びが連動していない、④実習中の学び内容が把握できない、⑤新たな省察モデルと実習プログラムが必要であるという、5つの課題があった。本学位論文は、保育実習中のエピソードをルーブリックの評価指標に紐づけるという独自のルーブリック使用法を考案し、保育実習領域へのルーブリック評価法の導入と実習プログラムの開発について詳細に検討したものである。

第1章では、上記の5つの課題を解決し、新しい実習プログラムを開発するために、「ルーブリック」に着目した。実習評価票としての実習用ルーブリックを開発し、実習中や実習事後にそれを試用し改善を加えながら、実習の省察モデルと実習プログラムを開発するという課題設定をおこなった。

第2章では、実習領域の新たな省察モデルとして、パフォーマンス評価としてのルーブリック評価法と、保育業界では定着しつつあるエピソード記述方法論の2つに着目し検討をおこなった。1章では標準化されていない実習評価が問題であったが、実際の活動を通して評価し評価尺度に観察可能な記述語を配置するルーブリックの特徴によって、この問題が解消されることが分かった。また、適切なタイミングでのフィードバックを行うことができるという形成的評価としてのルーブリックは、実習評価のツールや方法としての有効性が示された。本章で取り上げたエピソード事例をもとに、このエピソード記述方法論が、実習生のエピソード記録による省察に理論を与え、そのエピソードによって省察できることを示した。この2つのアプローチを検討する中で、このルーブリック評価法を従来のエピソード記述方法論と組み合わせ、ルーブリックの新しい使用法が考案できた。この使用法は、ルーブリックの評価基準にエピソード記録を紐付けるという本研究独自の方法であった。

第3章では、研究Iとして保育実習用ルーブリックの開発において、現場保育園園長・大学教職員・学生の三者が協働して作成に至った保育実習用ルーブリックとその開発過程から知見が示された。三者による評価観点の検討によって、各々の評価感の差異やズレが確認でき、評価基準を共有し現状に適した形で考えることができた。特に、被評価者である学生の意見は通常の実習評価には反映されておらず、学生の参加によって学びのプロセスに沿った評価基準や記述語について再認識できた。ルーブリックの導入によって、成績評価するための評定ではなく、学習促

進や成長の場を承認する機会としての評価への評価観の転換を意識できた。

第4章では、研究Ⅱとして保育実習用ルーブリックを実際に試用し改善を加える研究を行なった。中間評価の研究では、中間評価でのルーブリック使用に関する分析をおこない、実習中において実習用ルーブリックは、①ナビゲーション、②フィードバック、③日々の目標探索という3つの学習促進機能があることが分かった。特に、毎日の実習目標を立てることは実習生が最も苦勞することであり、これまで指導が難しいという課題があったが、このルーブリックの使用によりこの課題を解消することができた。また、中間反省会の場において、保育実習指導者と実習生がルーブリックを媒介に各々の評価をすり合わせ、保育実習指導者が実習生に助言しフィードバックすることができた。事後学習の研究では、省察ツールとしてルーブリックを活用した事後学習シートを考案し、実際の授業で使用することで学生の学びがどのように構成され促進されるかに関して検討した。その結果、ルーブリックを活用して事後省察を行うことで、①考案した教材シートは省察ツールとして機能する、②ルーブリックの活用により学外実習での評価と事後学習を連動させ評価指標に基づいた具体的な体験を省察し課題の明確化が可能となる、③この教材シートによる授業が評価できないものを承認する場となるという3点が確認できた。

第5章では、研究Ⅲとして保育実習用ルーブリックでの自己評価とエピソード・データをICTによって一括管理できるアセスメント・システムのモデル構築を試みた。このシステムにより、ICTによって得られた実習情報を教員組織内で情報共有し、①実習指導、②研究、③教育という3つの場面において管理・活用できるようになった。また、第4章で示した事後学習のデータ分析を通して学習の可視化と、ICT化によるアセスメント・データの活用の一例が示された。このように、複雑で捉えどころのない実習プロセスにおいて、「評価と指導の一体化」を促進する仕組みができた。事後学習シートを活用して行われる、他者の評価を介しての自己評価は、①他者への体験にコメントする、②他者から体験にコメントされるという2つの省察によって、メタ省察を行う構造となっている。コメントされる体験をテキストマイニングによってデータ分析すると、受容的・共感的・肯定的なコメントや指摘は、承認欲求を満たし、省察を促進させることが明らかになった。そして、そのプロセスは「認めてもらえる」から、「嬉しい」、そして「やる気」が出るという流れとなっており、承認欲求を満たす学習環境が意欲を生み出すことが確認できた。このように、「他者を介しての省察支援」は実習プログラムにおいて重要な役割を果たすことが明らかになった。

第6章では、まず第4章と第5章で得られた知見から、実習プロセスとその促進に関して整理し、従来のPDCAをベースにした実習プロセスに対し批判的に考察を加えた。そして、PDCAサイクルではなく、OODAループにそのモデルを求め、OODAループを援用した実習プロセスを提示した。結論として、第1章で提起した5つの課題解決とともに、研究Ⅰ～Ⅲの研究成果に基づき、OODAループの援用による実習活動モデルと、実習用ルーブリックを基軸にした実習プログラムを新たに開発できた。また、実習用ルーブリックだけでなく、それを活用した実習日誌（実習記録）や事後学習シート、実習のためのアセスメント・システムという省察を促進する具体的方法や仕組みを提案できた。

本学位論文は、これまでPDCAサイクルを基盤とし螺旋上に展開するとされていた保育実習プログラムとその省察モデルの過程を検討し、ルーブリック評価法の活用による実習プログラムを提案することによって、実習教育に新たな学術的モデルを提案した点、現場連携による実践研究から具体的なツールと仕組みという汎用性のあるモデルを導き出した点に学術的に大きな貢献が認められる。審査委員による本学位論文の内容に関する質疑に対して適切に回答できたこと、その他の学力・業績と合わせ、専攻の学位審査の基準に照らして博士の学位の授与に十分であると結論し、審査員は全員一致して、博士（学術）の学位に値すると判断した。

注 論文及び審査結果の要旨欄に不足が生じる場合には、同欄の様式に準じ裏面又は別紙によること。